現象世界に必然と自由とがある　　その 2

「蝶の雑記帳 139」の 2

2　カント哲学が導入する可想的な理念

カントはその著作を整然と体系的に構成するように著すが、「必然」と「自由」の問題は、カント哲学全体の構成における筋目の入れ方にかかわっている。わたしのアイディアが著書『純粋理性批判』のどの部分で生じたかをもう一度明らかにしておくことが有用だろう。今読んでいるのは、篠田英雄訳岩波文庫版の中巻、第二部「先験的弁証論」の第二篇「純粋理性の弁証的推理」のうち、第二章「純粋理性のアンチノミー」のところである。前半第二節～第四節あたりの、純粋理性が陥るアンチノミーに関して高尚で一般性をもつ論じ方に、わたしが口をさしはさむことはむずかしい。

なんとか食いついていけそうに思ったのは、第五節からの宇宙論的理念の部分で、特に第九節「これら四個の宇宙論的理念に関して理性の統整的原理を経験的に使用することについて」である。この表題中の「理性の統整的原理を経験的に使用する」という言葉が、議論が経験科学である自然科学の知見と無関係ではないことを表わしている。

長い表題をもつ第九節の先頭には“まえがき”が置かれて、考え方の指針が述べられている。その要点をおさえておくこ

とが必要である。まず最初の段落に、

> ―― 純粋悟性概念にせよ純粋理性概念にせよ、先験的に使用せられ得るものではない。感覚界における条件の系列の絶対的全体性は、まったく理性の先験的使用に基づくものであるが、しかしそれは理性が、物自体として前提するところのものからかかる無条件的完全性を要求したために生じたものである、ところが感覚界はもともと物自体を含むものではないから、感覚界における系列の絶対的な量というようなものはもはや問題にならない、つまり感覚界が限界を有するか、それともそれ自体無辺際であるかという問題は論外である。むしろ我々がここで論じなければならないのは、経験的条件の系列における経験的背進をどこまで継続したら、理性自身の課した問題に対する十分でかつ適確な解答を、理性の法則に従って見出し得るかということである。――

と書かれている(重要と思うところにアンダーラインを引いた)。

この文章をわたしなりに解釈すると、カントは、

(ア) 今からする議論は理性の経験的使用に踏みこまざるをえない

(イ) 「全体性」という規定は、現象を認識して得られる悟性概念にはないもので、理性が要求したもの、

(ウ) 悟性は事物と事象を「現象」としてとらえるだけで、「物自体」という概念は理性が前提するもの、

(エ) 悟性は、感覚界が有限か無辺際かを知り得ず、

経験的条件の系列に対して経験的に背進をどこまでも
継続することしかできない、

と要約して、四つの宇宙論的理念について理性の課した問題を考察しよう、と述べているのである。

次の段落は前段を補足するもので、

(オ) 絶対的全体性という理性原理は現象自体の構成的原理
として妥当しない、(と確認している)。

その上で、カントは、この節で議論するのは、

＊ 可能的経験の継続と量とに対する理性原理の妥当性を
考察すること

だと言う。その議論と考察がめざすのは、

＊ この理性原則が(……)、経験の領域においてできるだけ
広範囲の悟性使用を経験の対象に適合するようにし得て、
その原則があたかも対象自体をア・プリオリに規定する
公理に匹敵するほどの効果を持つようにすることである、

とする。

“まえがき”に続き、複数の細項目をもつ四つの項目がローマ数字で番号づけられて次々に考察される。それらはみな長い表題をもち、説かれていることも簡単ではないけれども、自然科学に関係する言葉も現われて、議論に参加できるのではないかとわたしに思わせた。ここからは、ⅠからⅣまでの四つの項目とその細項目ごとに、カントが言っていることを

順番に考えていこう。わたしが特に考えてみたい文章は改行して一つの段落とし、(A)・(B)・・・のような記号をつける。

Ⅰ．「現象を合成して世界全体とする場合にその合成の全体性に関する宇宙論的理念の解決」

先頭でカントは、理性の統整的原理の基本を、

(A1)――経験的背進においては、絶対的限界というものの経験はあり得ない、したがって経験的に絶対的・無条件的な条件というものの経験もまたあり得ない。

という命題だ、と明言する。

さらに、次のような言葉が続く。

(A2)――私は、世界全体というものを常に概念においてのみもっているのであって、決して（全体として）直感においてもっているのではない、

(A3)――「私は世界全体の量の概念も、経験的背進の量によって初めて構成せねばならないのである」し、「世界は（全体としては）、決して直感によって与えられるものではなく」、「世界の量自体については何事も言い得ないし、世界において無限への背進が行なわれると言うことすら言い得ない」・・・。

さらに、

(A4)――経験の対象全体[感覚界]については、何事も言い得ない。

という言葉まである。さらに言葉を足して議論されているが、それは割愛しよう。

最後の段落に、Ｉの表題に対する結論的な言葉として、

(A5)――「世界は決して全体として与えられ得るものではない、また与えられた条件つきのものに対する条件の系列すら、世界系列として全体的に与え得られないのである」

が置かれている。そして、

(A6)――「この経験的背進は、不定への背進であり、かかる背進によってのみ初めて現実的となるような（経験の）量を与えるのである」

と締めくくられる。

この項Ｉに書かれていることを言い換えれば、

① 人間が把握する経験的世界はいつも認識の途上にあり、けっして完全な世界認識には到達できない。したがって、科学が到達した知見を完結した知識と考えてはいけない

ということになるだろう。

しかし、ついには統合的に整序された認識に到達できるという理想を掲げて追求するのでなければ、認識途上にもせよ意味のある認識を構成することはできないだろう。だからカントは、そういう要請を「統整的原理」と呼んで掲げ、指針とするのである。

カントはこのように深く「世界」というものを考察しようとしているのである。「蝶の雑記帳 132」で批判したことだが、M. ガブリエルがカントの考察をほとんど無視して代わりに提出する簡便な「世界」がいかに底が浅いかは明らかだ、と思う。

Ⅱ. 「直感において与えられた全体を分割するその分割の全体性に関する宇宙論的理念の解決」

ここの先頭には、意訳してまとめると、次のような一般的所見が述べられている。

(B1)――第Ⅰ項では全体を認識する言わば“上昇的な”背進が考えられた。そこでは、条件つきのものから上位の条件へ背進するとき、その上位の条件は下位の条件つきのものの外にあり、経験的背進によって初めてつけ加えられる。それは、「不定への背進」と呼ぶことができる。

それに対して、この第Ⅱ項では、直感において与えられた全体を分割することが考えられている。要約すれば、

(B2)――この場合には、系列の絶対的全体性はその“下降的な”背進が単純な[部分をもたぬ]部分に達し得たときにのみ明らかになる。しかし部分は、連続的に背進する分解の過程において依然として可分的であるから、かかる分割即ち条件つきのものからその条件への背進は無限に進行する。この場合には、全体的なものの条件(部分)は、条件つきのもののうちに含まれているし、また条件つきの

ものは、限界で囲まれているこの条件つきのものの直感において全体として与えられているので、条件はすべて条件つきのものと共に与えられている。それだからこの“下降的な”背進は、「不定への背進」と名づけてはならない。…このような全体的分割は、継続的に進行する分割即ち経験的背進そのものによってのみ実現される。つまり条件の系列はそのような背進によって初めて現実的なものになる。この背進は無限に続くもので・・・、この“下降的な”系列は背進を無限に続けて完結する時がない。――

次に、上の一般的所見から、境界を有する外的現象である物体が考察される。そのとき、カントの認識論では「空間」が重要な基礎的概念だから、空間と合わせて考えることになる。カントは、――実体としての物体は、空間において考えられねばならない――と言う。わたしにはこのあたりの議論を十分につかめていないが、その文中にある、「空間はさなくとも自存性をもたない」とか、「実体は本来一切の合成の主体たるべきもの」という言葉に留意すべきだと思う。そこに、カント独自の

(B3)――現象における実体は、純粋悟性概念によって考えられるような物自体ではない。この直感においては、無条件者なるものはまったく見出され得ない――

という考えが加わる。しかし、そのことが分割の系列にどの

ように関係するかは述べられていないように思う。

次の段落に、有機体の分割にかかわる見解が述べられるが、「有機」ということについて今日でも意味をもつ重要な見方が表明されている。すなわち、

(C1)――およそ組織されている(有機的)全体においては、この全体を組織しているどの部分もさらにまたそれ自身組織されている。約言すれば、かかる有機的全体は無限に組織されている、というようなことは、まったく考えられ得ない。――と。

有機体についてのこの見解は、現代生物学の知見と矛盾しない。しかし、このあとに、

(C2)――有機体を構成する物質の分割は無限な背進と見なされるにもかかわらず、部分の有機体総体としては完結していると見なされる、我々は自己矛盾に陥らざるを得ない――

と述べる。これは、有機体の分割について、論理を閉じさせることができないことを告白しているのだろうか。

おしまいの方に、

(C3)――一つの組織された物体が、どこまで有機的に組織されているかということを決定し得るのは経験だけである

と表明される。弁証的議論はさらに続き、

(C4)――さらにたとえ有機体に関する我々の経験が、かか

る場合に無機的な部分を見出すにいたらないにしても、しかしこの無機的な部分は少なくとも可能的経験に存しなければならない。

これらの文章に欠陥を見つけることは困難なように、わたしには思える。しかし、この文章には、

(C5)――ところが現象一般の先験的分割がどこまで達するかということになると、これはとうてい経験によって決定できる問題ではない。この問題に答え得るのは、理性の原理だけである。即ち、延長を有する物体の分割における経験的背進を、現象というものの本性にかんがみ、決して絶対的に完結したものと見なすことを許さない、という原理である。――

と註がつけ加えられて、再び、

①´　われわれが経験的に到達する科学的知見を完結した知識と見なしてはいけない

というような趣旨のことが述べられている。

Ⅱ.2　「数学的-先験的理念の解決に対するむすびと力学的-先験的理念の解決に対するまえおき」

この部分は第Ⅱ項の細目である。最初に、「先験的理念によって生じる純粋理性のアンチノミー」について概括して、

(D1)――アンチノミーの解決法は、正命題と反対命題の二つの相反する主張が共に偽であると論定することだ、

(D2)――与えられた条件つきのものに対する条件の系列における全体性(という理念)が矛盾を生じさせるのだ、

ということが述べられている。だから、

(D3)――そういう背進は完結したものと考えられてはならないのである。困難は、理性が悟性に対して系列を長くしすぎるかそれとも短くしすぎるかしたために、悟性が理性理念にどうしても適応し得ないところにあったのである。――

そのあともっと具体的に補足が続き、

(D4)――我々はその際、それぞれの客観のあいだに、従ってまたこれに関する悟性概念のあいだにも、本質的な相違が現存することを看過した――

と述べる。ここに、

(D5)――悟性概念というのは、理性が理念に高めようと努めているところの純粋悟性概念[カテゴリー]のことである、

と註釈しているから、理性がもたらす理念は悟性概念を“高めたもの”なのである。そうすると、先験的理念がもたらす四種の問題は、分量・性質・関係・様態という四つのカテゴリーに対応することになる。

カントは、前の二つを数学的-先験的理念の問題、うしろの二つを力学的-先験的理念の問題と呼んで区別する。そして、

(E1)――（経験的な現象にかかわる）力学的アンチノミー

では、理性の要求と一致するような前提があるいは見出されるかもしれない――

と期待する。ところで、

(E2)――条件の系列は、経験的背進においてそれがどこまで延長しているか、ということを考察する限りでは、どの系列もみな同種的である。しかしこれらの理念の根底に存する悟性概念は、同種的なものの綜合だけを含むのかそれとも異種的なものの綜合を含むのか、二つのうちのいずれかである。そしてこの異種的なものは、原因と結果との力学的綜合においても、また必然的なものと偶然的なものとの力学的綜合においても、少なくとも承認せられ得なければならない。

そう確認しておいて、カントは、

(E3)――現象の系列における数学的結合にはそれ自身系列の一部であるような条件しか入りえないのに対し、感性的条件の力学的系列は、異種的な条件、つまり系列の部分ではなくて、まったく可想的なものとして系列の外にあるような条件も認められる。そして、これによって理性に満足が与えられ、無条件者が現象よりも前に据えられる――

と考えようとする。

こう考えるカントは、

(E4)――力学的理念は、現象の成立条件として、現象の系

列のそとにあるような条件を承認するところから、数学的アンチノミーとはまったく異なる結果が生じてくる。数学的アンチノミーは、相反する二つの弁証的主張を共に偽であると論定せざるを得なかったが、これに反して力学的系列における条件つきのものは、現象としての系列からは分離せられ得ないが、それにも拘わらずなるほど経験的に無条件的ではあるがしかし非感性的な条件と結びついていて、一方では悟性にまた他方では理性に満足を与えようとするのである。――

と言う。ここの註で、

(E5)――悟性は経験的に無条件的であるような条件が現象のなかにあることを許さない。ところが可想的条件は、現象の系列に属するものではない。…この可想的条件が経験的条件の系列を中断しないとすれば、このような条件は経験的に無条件的なものと認められ得るし、またこれによって経験的背進が中断されるということもない――

とする。それだから、

(E6)――力学的アンチノミーの場合には、単なる現象における無条件的[絶対的]全体性をどんな仕方でか求めようとする弁証的論証は覆されるが、そのかわりにいま述べたような仕方で是正された二つの理性命題[正命題と反対命題]は共に真であり得るという結果が生じるのである。――

と結論的に言う。しかし、(E6)の前にある(E3)～(E5)の文章は、断定的な調子を帯びているものの、カントがそう考えたいとする要請のようなものとしか、わたしには見えない。

以上、(A)～(C)→(D)→(E)への記述の展開を見ると、推論は、ごくわずかずつ論理の隙間をもちながら進められていて、必ずしも論理必然的とは言えない、とわたしは思う。間隙は、確定的な意味をもてない「可想的なもの」が導入されることで起きている。「可想的条件」は、「非感性的」であり現象の系列に属さないことによって、経験的条件の系列を乱さない、と想定される。そうすることで、本来悟性が現象のなかにあることを許さない「無条件的なもの」が、理念においては許される、とされるのである。

その論述の変化を位置づけして、番号をつけてわたしなりに要約すると次のようになる。

② この細項目Ⅱ.2 でカントは、先験的分析論で確立した認識理論から“離陸”して、新たな哲学的領野を架設しようとしている。

その拡張は、架設した理念の領野で「可想的なもの」あるいは「可想的条件」を導入してなされる。その理念の領野は、認識論で「感性によってとらえられ悟性によって認識されるとされる現象世界」を超えたところにあり、経験によって知られる領野の内にはない。

ここで言う「世界」と「領野」は、これまで哲学者が論じて

きたような特別な意味を含むものではなく、自然言語での常識的な言葉だとしたい。通常の言葉づかいでの「世界」または「自然」は、人間が向き合っている事物の総体とそれらが示す事象の総体を漠然と言い表わし、人間もそこに含まれる。人間が相対している諸対象物を意識しているときは世界よりも自然という言葉が使われるようだ。漢字の「世界」は、境界を意味する「界」という字をもつ。だが、カントが言うようにその世界の外縁はまだ不定なまま、そして内部もよく知られていないまま使われる。カントは事物とそれらが示す事象を本質的実体の知られない「現象」と呼ぶけれども、生きている人間は、その現象を“耳目…五臓六腑をもって”また“血と涙を流して”身心で経験し、事物と事象が実在すると知る。先に表現した「現象世界」という言葉はそういう意味合いを含む。もう一つの「領野」という言葉は、境界を意識させない「広がり」の意味で選んだ。「世界」や「領野」を概念的にすっきりと議論するには、数学における抽象的な空間に相当するとするのがよいかもしれない。その場合、カントが架設する「可想的」な領野は「現象世界」とは異質で、二つを統合した問題空間は、「時空」と不可分な事物事象としてある「現象世界」に「可想的」な異次元の軸を付加して拡張された空間、ということになるだろう。

2025 年 8 月処暑　　海蝶　谷川修